



地域の環境美化を願う大江さん

商店街の灰皿ケア

今月の表紙は、街頭に灰皿を置いての美化活動を始めた伏古商店街振興会（会長 大江康博さん）の皆さんです。

伏古商店街は、伏古二条から八条までの五十六店で構成され、東区でも古くからある商店街です。この商店街では、かなり以前から日常的に、歩道の街路樹ますから雑草を取り、花を植えるなどの活動をしています。環境美化への意識が高まっています。また、昨年一月に、東区の商店街連絡協議会で「ポイ捨て防止宣言」を行ってからは、お店への啓発ステッカーの掲示や清掃活動にも取り組んでいたりしました。そして、今回さらに、それぞれの店の前に灰皿を置き、ポイ捨て防止に乗り出すことを決めます。

四月二十四日、灰皿が大江会長のお店の前に届けられ、趣旨に賛同し、協力を申し出たお店の方々が、集まりました。灰皿は、東区役所が設けた「灰皿ケア制度」の一環として届けられたもの。この制度は、日本たばこ産業から区役所に提供された灰皿を、設置を希望し、自分たちで管理のできる団体に、貸し出しするものです。

会長の大江さんは「今までも、花を植えての雰囲気づくりに力を入れてきましたが、ごみ拾いをすると、やはりたばこの吸い殻が目立ちました。そこで、灰皿を借りられる話を耳にして、利用してみようと思ったのです。この灰皿のことを、多くのお客さまに知ってもらえれば、ポイ捨ても減っていくのではないかと思います」と期待を込めて話してくれました。

一人ひとりの「ちょっと面倒だから」「このくらいなら大丈夫」といった意識が積み重なって、私たちの身の回りでは、吸い殻のポイ捨て以外にも、困ったことがいろいろ起きています。

そんな時には、この灰皿のことを思い浮かべて、周囲への配慮を忘れないようにしたいですね。

北海道の地名の多くは、アイヌ語に片仮名や漢字を当てたものであるいは開拓と関係のあるものです。また、近年は、土地の発展を願ったものなどが多くなっています。今月から、古くから残る東区のいくつかの地名の由来を紹介していきます。

美香保

美香保という地名は、特定の行政区域を指すものではなく、美香保公園（北二〇～二二東四、五）付近一帯の総称のことです。

一九二八（昭和三）年、札幌村議会議員の柏野忠八と元札幌区会議員の宮村朔三がこの辺りの土地を手に入れます。土地の購入にあたっては、柏野の義弟にあたる大塚藤四郎が尽力しました。

三人は、中央付近を公園とし、土地を宅地として売ることを決めます。分譲の際、三人の名字の頭文字を一つずつとり、年齢順に並べ「ミカオ公園分譲地」としたのが地名の始まりです。



当時のミカオ公園分譲地



住宅建設当時の大学村

一九四一（昭和十六）年、公園は市に寄贈され、市はその前後に付近の土地を買収し、約八・三畝の大きな公園用地を得ました。このころになると、「ミカオ」より語呂が良く語感が美しい「ミカホ」と呼ばれるようになります。「美香保」という漢字は、都市計画公園の事業決定を行う際に当てられたといわれています。

大学村

大学村という地名も特定の行政区域ではなく、現在の大学村の森（北二八東四）付近の呼称です。

一九五〇（昭和二十五）年、当時の北海道大学法文学部は法経学部と文学部に分かれることが決まり、多くの教官を招くことになりました。この時、北二七、二八東二～四付近に、新任教官用の住宅八十戸ほどを建設します。当時は、周囲の家もまばらで、ちょっとした村の出現となりました。住民がこの辺りを「大学村」と名付け、以後そう呼ばれるようになったのです。

ひがすとりー

第27回

東区地名考（一）